

結城友奈は勇者である  
～無限の造花～

ダンスの人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

讃岐中勇者部に5人部員はいる。4人の無垢な少女と穢れていると言うにはまだ純真で。

真っ直ぐかと言うには歪み過ぎてしまった少年がいた。

# 目次

1話	日常	1
2話	過去	10
3話	襲来	18
4話	対峙	26
5話	憂鬱	35
6話	覚醒	40
7話	登場	44
8話	密会(笑)	52
9話	決裂	59
10話	侵食	67
11話	極限	77
戒めの世界		84



## 1話 日常

三ノ輪銀との出会いは養子に出されて新しい家族に、いやよりその家特有の教育が漸く身に付いていたあのとき。それが嫌で逃げるように宛もなく彷徨つてた。イネスで。

格だけでいうなら乃木、上里と引けを取らないこの家なら行くことすら禁止しそうなこの場所。からこそここにいた。いるとは思われないから。

日頃の鬱憤を晴らすように買い食いしまくったからか尿意を覚え、トイレに向かった。

「うう、大丈夫だからな、お姉ちゃんに着いてるからな、ああもう男が簡単に泣くなよ。お前はこの私の弟だろ？」

目の前に一緒に迷子になってしまった弟と慰める姉。特に姉の顔は不安を弟に悟られぬよう明るく振る舞っている。けれど、彼女もまだ幼い。お姉ちゃん、という責任感はあるけれど、まだ親がいなくては不安な年頃。次第に仮面が剥がれていく。

あの顔を曇らせてはいけない、そんな考えが浮かんだ。だからだろうか思わず声をかけていた。

「大丈夫か？迷子？」両親一緒にさがしてやろうか？」

「ちがうし、それあんたじゃん」

グウの音もでない。ていうかここトイレの前。大方母親がトイレに行ってるのだろう。そして母親が姉に幼い弟を任せただろう。よほど信頼されていると見える。それに比べ声をかけたのは独りの小学生。迷子に見えるのは断然後者。

「いや、迷子じゃないから。1人で来てるだけだから。それくらい出来るから。1人でカラオケくらい行けるから」

「1人でカラオケとか自慢できるようなことじゃないからな？てかつくづく迷子みたいだぞお前。親御さんどうした？」

「いや、マジで1人でぶらぶらしてるだけなんだけど」

「ええー高嶋くん、ホントでござるか？」

「えつ、お前俺知ってるの？」

「同級生の顔くらい覚えてないの？」

「……三木さんだろ？覚えてるよ」

「おい何だ今の微妙な間は、てか三ノ輪だよ。時間かけておいて間違えるとかないわー」  
「す、すまん」

「いいよ、暇してたし。まあ改めて私の名前は三ノ輪銀。それじゃ宜しく覚えててね、高嶋士郎君？」

同時に彼女母親が出てきて、一緒に彼女たちはいつてしまった。

「銀、あの子は？」

「高嶋士郎。クラスメイトだよ、人の名前あんま覚えないうつだけど」

「へえー、あなたも？」

「うん、だから教えてやったの、この銀様の名前！」

なんて会話をしながらベビーカーを押しながら、2人は行く。

士郎はそんな2人の背を見てることしかできなかつた。あまりにも自分には遠すぎて。

---

讃岐中勇者部は人のために勇んで活動する部。猫の里親探しにお悩み相談、果てはボランティア活動まで、何でもござれ。そんな部活。要はスケツ○団や割とゆるく

なつた奉○部、美少女しかいなくてちゃんとしてる○事屋みたいなもの。

さて、そんな彼女たちは今。

子供たちの前で劇の真つ最中。

ナレーターが喋り、人形が中の人の声に合わせて動いている。

『もう悪いことは止めるんだ、魔王！』

『私を怖がつて悪者扱いしだしたのは村人たちの方でないか！』

キャラの掛け合いが進み、勇者は魔王と対話を試みる。そして次第に声に熱が籠もり始めてきた。だが忘れてはならない。これは人形劇。熱が籠もつていいのはセリフと人形の動きのみ。演じる側に身振り手振りはこの際要らない。でなければ。

「君を悪者になんかさせん、『パンツ』あつ」

どここが当たり、舞台（ハリボテ）倒れて人形を動かすものが見えてしまう。

「やっちゃった……」

「あ、当たんなくてよかった……、でもどうしよう」

中の人が見えてしまうアクセシブ。遊園地やヒーローショーのそれに比べればまだマシだが、今回の劇はややこしいことになる。だから勇者役は。

「ゆ、勇者キーツク！」

誤魔化しとして勇者が蹴り（頭突き）を魔王にかます。

話し合いとは何だったのか。これが言っていた話し合い（物理）なのか。なんか白い魔王の家に伝わってそうな交渉術である。

それはそれとして子供たちが騒ぎ出す。

「話し合いつていつてたじゃない！ああ、もう、ええい、樹ミュージック！」

「ええ!!えつとえつと、えい！」

そして流れる魔王のテーマ。中の人もノリノリである。勇者、ピンチ。

そしてナレーターは事態を収めるため、策を弄する。すなわちヒーローショーあるあるのひとつ、子どもたちの応援パワーで奇跡の逆転勝利というテンプレ!

「みんな、勇者を応援して！みんなグーで勇者にパワーを送ろう！がーんばれ♪、がーんばれ♪、がーんばれ♪、がーんばれ♪、がーんばれ♪、がーんばれ♪」

意外！勇者にパワーを届ける応援は勇者にバフではなく魔王にデバフ！（魔王役のアドリブです）魔王は弱まった！

「今だ！勇者、パーンチ！」

勇者、ではなくその中の人の拳で魔王（中は手）を攻撃！魔王は倒れた。剣と盾いらなくね？

「これで魔王も分かってくれたよね！」

「こういうわけで魔王は改心し、祖国は救われたのでした。万歳、万歳、万歳♪」

「「「「万歳、万歳、万歳！」「「「「」

アクシデントがありはしたものの、勇者役の結城友奈の咄嗟の行動、それに触発された犬吠埼樹のファインプレーにその姉、魔王役犬吠埼風のアドリブとナレーター  
の東郷美森の機転により劇は幕を下ろし、勇者部の活動は成功となった。

再生されていた映像が終わる。仮面を付けた男がそのディスクを回収しながら

「以上が勇者部での本日の活動でございます。過去のそれと似たようなシチュエーションではありましたが今のところご学友の記憶はやはり兆しは見られません」

声変わりしたばかりの仮面は感情のない声で報告する。

「・・・そっか、楽しそうで何よりだよ。でもやっぱり普通の記憶喪失とは違うんだね、わっしーのは。」

「そして貴方様のご懸念の通り、次の勇者は彼女たちとなるでしょう。神樹様からの信託も降りました」

「わかった。もういいよ、ありがとうね。ねえ、しまさ「他の人にバレると厄介ですので私はこれで」……」

相手が言い切る前に返し彼は踵を返して暗闇へ消えていった。学校に行けない彼女に、学校に行ってる自分がこれ以上話をするのは、嫌味にしかならなそうだったから、

——なんて理由付けしても誤魔化しきれない

(逃げてるだけだよな……俺)

「……」

ベッドの柱と柱のあいだに膜のよう広がる暗闇、そしてその中にある微かな蠟燭の明かりだけが彼女の視界に残っていた。

偶に来る彼がいなくなればいつもと同じ。もう慣れてしまった孤独に彼女はいる。

---

勇者部には5人部員が居る。

笑顔と元氣担当結城友奈。情報担当東郷美森。占い担当犬吠埼樹。部長犬吠埼風。これらが基本メンバー。——そして偶に手伝いに来てくれる幽霊部員になりかけの男子生徒、結城士郎が1人いる。パツと見、美少女しかいないこの部は男が1人で

入るのには割と肩身が狭かったりするのかあれこれ理由を付けてよく欠席する。その癖にいい所で助っ人になるような便利キャラ。

「いやー、この前の劇は大成功だったわねー、幼稚園の方からお礼のメールきてたんだって?」

「

「ええ、園児達からすごい好評で、また今度やって欲しい、って。次も脚本お願いしますね、風先輩?」

「はっはー、まっかせなさい!しかし私の意外な才能がこんなところで発揮されちゃったかー、辛いわー、才能ありすぎて辛いわー」

「もう、お姉ちゃんたら。あまり調子乗りすぎたらダメだよ?占い今日微妙だったし」「このくらい大丈夫よ。しかし次回はもう少しキャラ増やそうかしら、丁度手の空いてそうなのいるし。友奈、士郎は?」

「いや、今日から3日ほど学校来ないって。なんか色々あるらしいんだけど、教えてくれないんです」

「またか。相変わらずの秘密主義ねあいつていうか、あいつ出席日数いけるの?」

「公欠扱いだから大丈夫だぜヒヤッハー、とかアレが抜かしたから大丈夫でしょう」

「東郷、あんた妙に士郎に棘あるわね?」

「そ、そうですか？」

「さては、寂し「それは無いです」あっはい」

「ええー、ほんとにー？」

「もう友奈ちゃんまで。私には友奈ちゃんが、いるからいいの」

「ありがとー東郷さん、私も東郷さんいるから寂しきなんて平気だよ！」

「もう友奈ちゃんたら」／／

「まーたはじまった。ていうか、あいつほんとどこいつてんのよ？しかも公欠扱いって」  
「それが私にも何も話してくれないし、お父さんともお母さんとも妙に距離とってるし  
私もどうすればいいのかわかって」

（まあ、養子先に出されてて、いきなり血の繋がった家族と暮らす、ってそりゃいきなり  
他人と暮らすのと大差ないわよね・・・）

この便利キャラは力仕事のいる活動の時以外はどこかに行っちゃってしまっている。  
家庭環境が割と複雑なのか妹とも距離を置いている

## 2話 過去

炎の中歩いてる。／炎は生の存在を許さない。

戦いには慣れてる。／迫り来る有象無象。

痛みを我慢して。／回路を発火させて。

飛びそうな自我を繋ぎとめて。／牡丹の声が脳に反芻される。

消えそうな思い出を嘔み締めて。／消えない知らない散り行く花が舞う。

情報の激流の中を進み最善手を打ち続ける。／後悔の記録から希望への道を探

す

身体を機械にして。／鉄の造花は永遠に決して散ることは無い

偽・勇者御記より抜粋

部活動してるのはただボランティアがしたい訳では無い。部長と同じで、他

の理由がいくつかある。上にそうしろと言われたからそうしているだけ。養子に出された先の家族は既に死んでおり戸籍上はまさに天涯孤独なので他の家で暮らせと言われても大した抵抗感はなかった。今度こそ、という意気込みもあったから。

——まあ、でも。まさか生家にもどつて暮らしながら、鷲尾、いや今は■■■■か、が  
いる部活に入ることになるとは。気まずいなあ。

4月上旬。中学生の準備シーズン時に大赦からの指令があつた。実家に戻り地元の中学に通つてとある部活に入れ、というものだった。

尚、そのルールは、

一、勇者たちがお役目に集中できるように障害となり得るものを排除すること。

二、勇者が戦えなくなった時、もしくはお役目を放棄した際にのみお役目を代行することを許可する。(尚、戦況が悪化の一途を辿る場合は上記を破棄し、戦闘に参加してもよい)

三、大赦、並びに全人類への反逆の意があれば直ちに報告、速やかに勇者に変身前に拘束すること。

四、上記第三項において、勇者化により拘束が不可能であると判断できる場合において人的、社会的被害が出る前にそれを撃破、拘束すること。不可能である場合殺害を許

可する。手段は問わない。

五、上記全項のうちどれかの条件に該当しない場合、工房外での魔術の使用、及びバードックスとの交戦を許可しないものとする。

六、此度の任務の口外を禁ず。例外はない。

七、第二項における条件が満たされた際、素顔を晒してでの戦闘を禁ず。直ちに仮面を投影、着用して臨むこと。

というもの。約一年後の話だというのに気が早い気がしないでもない。

かなり簡略されており長つたらしい文章でないが、忘れてたですませにくいのがキツイ。特に第五項には悩まされる。

戦闘の縛りは意味不としか言えない。大赦としては万が一のことを考えているのだろう。勇者と違い自分は替えはきかないとしても石橋を叩きすぎである。

そもそも今まで使いなれてるのは、高嶋の当主が代々受け継いできた工房で、それは四国にある個人が持てる唯一の工房であり、生家から遠くはなれた大赦本部近く。自らの手で改造しかしたことしかない土郎がこんなところで新しく工房を作るとか無理なのだ。

協力者を探そうにも魔術は基本隠匿するもの。魔術回路のない向こうの親家族は頼れないし、そもそも四国において魔術師はもう土郎しかない。（定義的には土

郎も怪しいが)

いちいち家に帰るのが馬鹿らしいので、大赦の晴信さんに相談したら、いつでも大赦の工房に来れるように送迎しようか?、とか提案された。乗せられた・・・

そんなこんなで承諾して、決まる引越越し事情。

---

いつまでこの家にいたかは覚えていない。

物心つく前に養子先に行ったから。あいつと入れ替わりで。

だからか、懐かしさというのはあまり感じない。もはや他人の、民泊に泊まる気分だ。これからしばらく寝泊まりする家だというのに異物感が拭えない。

---

赤の他人のような血の繋がった両親と再会は大赦の中でも兄貴分みたいな人  
を交えてのものだった。

場所は家がオーナーをやってる料亭。魔術を知らない——黙認してる方が正しい——  
親戚筋の人が経営している。

両親は時間よりも早くに着いていて、奥に通された時は緊張していた。

大赦の命令とはいえ、2歳の時に養子にだした息子と約10年ぶりに会うのだ。彼らは恨み言の1つや2つは来るものと覚悟しているのだろう。目の前の男の子にとつて自分たちは、顔もろくに覚えていない妹のみを優先し、自分を養子にだした人でなしだ。少なくともよい感情は抱かれてはいまい。

今でも2歳の彼を養子に送る時の光景が蘇る。

必死に泣き喚き、行きたくない、行きたくないという少年を無理矢理送り出したあの時の光景は今でも頭にこびりついて離れない。

でも覚悟していたことは何一つ起こらなかった。恨み言は愚か皮肉すら飛んでこない。

大赦より時たま息子は利口で冷静な子に育っていると聞いてはいた。だからキツチリ教育されているから抑えていると最初は思っていた。

でも違う。反応がかなり薄い。抑えているでも、ましてや両親との再会に言葉が出ないわけでも、緊張してるわけですらもない。

無関心。そう無関心すぎるのだ。他愛ない世間話に適当に相槌をうつのみ。振れば話はするが、積極的に話そうとはせず、自分の世界に入っている。隣に座る仮面の人も苦笑いしてるのが感ぜられた。

だからなのか、大赦からの使いが気を利かし、帰っていった。個室には3人きり。会話はもちろん続かない。『士郎』学校はどう?、と話を上げる。

しかしそれは地雷であることにすぐ気づいた。この春から遠く離れた我が家に住み讃岐中に入學するのだ。小学校の同級生とはおさらばなのである。

案の定本人は苦虫を噛み潰した顔をしている。でもこれは名前を呼ばれた時からその嫌悪感があった。

しかしすぐ顔は真顔に戻り、ええ問題ありません、と返事する。

未だ敬語である。それが彼と両親との間にある絶対的な壁、いや溝を示唆していたことは誰の目にも明らかだった。

だが、悲しむ資格はない、これは自分たちの自業自得でもあるのだから。だけでも会話はそれでも続かない。

あのあと食事についての会話だけ少しして済ませ、家に戻り必要なものをまとめて、結城家に行った。

「貴方が今日から家族になる士郎くんだよ、初めまして! 結城友奈です!」  
妹の方に初めてあった。

両親からは予め言われているとはいえ年頃の女の子にとって、同年代の奴を兄弟として同じ屋根の下で暮らせ、なんてあまりにも受け入れ難いとおもっていたのに。

だから割と猫被りでない好意的な受け入れ方には驚いた。

(明るい子だな、やりづらいかも)

第一印象はこんなところだった。彼女に抱く複雑な感情を含めても嫌いには慣れそうにない。

部屋に案内された。勉強机と本棚とベッドがあるシンプルな部屋であった。あとはダンボールに色々詰まっている。先に送っておいたのだ。費用は大赦が出してくれたらしい。

ダンボールの中身を色々出したりしていると手伝いながら色々質問さられた。あまり初対面の人と自発的に喋るのは――業務的な会話はともかく――苦手で質問してもらうのは楽だ。適当に答えながら部屋を整理する。

彼女はとても楽しそうに質問の返事を聞いている。こいつ人たらしの片鱗が垣間見た気がした。

まあ、こいつとは喋りやすい。この家での暮らしが少し楽になりそうだ。

——こいつゲームやるかな。

最初抱いていた複雑なそれは既に鳴りを潜めていた。

この家の全員は友奈と自分はトレードした関係ということ覚えていない、ということとは今は置いておこう。

東郷美森が来たのはその1週間後くらい。

### 3話 襲来

犬吠埼風は自分たちは勇者候補に選ばれただけと思っている。しかし、

——授業中なのに周囲はまるで絵画のように。

実際は『候補に選ばれた』ではなくて、

——書く音、捲る音、呼吸が止まった空間で。

『勇者に選ばれた』のだ。

——鳴り止まぬ樹海化を知らせるアラーム。

犬吠埼風はそれ身に染みるほど理解した。

教室を飛び出した。目的地は。

(よりによって私たちが選ばれるなんてツ！早くみんなと合流しなきゃ！まず樹！)

1年の教室、に間に合うより先に視界は花びらで覆われて世界は2年ぶりにまた塗り変わる。

世界は右後ろから聞こえるアラームがなると同時に停止した。映画のワンシーンを抜き出したような写真のような空間で。

——何年ぶりだろうか、この感覚。

結城士郎は極めて冷静だった。

自身の内部で何かが停止させる何かを弾いたようだった。防水加工された紙が水を弾くような感覚。

後ろで廊下に出てきた友奈と東郷が慌てふためいている。

だから2人のことを思考の隅に追いやつて、自らの行動方針を立てる。

（んなもん決まつてる。樹海になれば俺は空気椅子状態で固まつてる愉快的なオブジェだ。周りが消えてる中、俺だけがこんなだと明らかに目立つ。怪しさ爆発、警戒されてしまう。だからさっさと魔術回路を起動して距離を取る。答えは簡単だ。だが問題はあいつらだ。まだ近距離にいる以上多少マナの揺らぎを東郷に感じ取られるかもしれない。何より動けるのに止まっている振りは到底できそうにねえ……。そうだ世界が塗りつぶされる瞬間に動くじかないか。あまりやりたくねえ……。）  
そして世界は花びらに覆われる。

樹海化において神樹が世界を停める理由は、世界を止めることによってより樹海化をスムーズに行うためである。(動画より写真の方が加工しやすいのと同じである)そして人も動物も世界の一部分として塗りつぶす。

また勇者は、持っている精霊が目印となり世界の一部分と神樹にカウントされないため塗りつぶされず、樹海化時に座標を最適なところに移してくれる。

ではなぜこの男は樹海に入れるのか。  
それは彼が樹海とも世界とも異なるルールを

持つ『世界』を持っているから。だからなのか神樹の影響を受けづらい。それは神樹の統治する四国においてかなりのハンデをもたらす。特に樹海化の時は。例えば、ほら。

(なんでさ……、最悪すぎだろ)

士郎は予定通りに回路を起動させようとしてすぐその違和感に気づいた。足元が不安定、いや何も無い。

(なんでこんな微妙な高さで空気椅子してんだ……。)

神秘的な空間で空中——真下の足場とは約3mほど離れているか——で空気椅子す

る愉快男子中学生なオブジェが在る。シユールすぎる光景がそこにはあった。

無論、神樹の影響を受けにくいのもあるが、そもそもこの世界にバグそのものみたいな方法でら入ってきたのだ。正規で受けられる座標調整の恩恵が受けられなかったために起きたのが今回のような悲劇だ。

意外かもしれないが、これはまだマシな方である。座標が調整してもらえないということは、根や地面にめり込んでいたり、遙か上空からの無課金スカイダイビングを決行させられていたかもしれない。そんななか、これは僥倖と言えよう。

だが不幸中の幸いならぬ、不幸中の幸い中の不幸が起こった。最悪と思つたのはこれのことだ。そう合流してしまつたいたのだ。彼の右斜め下に。この光景を一番見られたくない連中が。

勇者部全員が。

3 mの高さで空気椅子状態で固まつてる愉快男子中学生なオブジェは必死に思考する。

(どうするどうするどうするどうする、今動けば確実にバレる！回路起動して落下中にフードと仮面を投影するか？いや無理！投影の音で速効でバレて顔を見られる！てかなんで中途半端な高さで俺は静止してんだ！せめて5メートルくらいよこせや！ヤバ

イヤバイヤバイヤバイヤバイヤなんも思いつかねえ、ていうかこうしてる間にも気づかれなくても限らねえつてのに！この状態で気づかれたら、絶対笑われてしまうわ・・・、主に部長と友奈辺りに。東郷は笑いはするが後で冷静になつて警戒MAXになるな、樹ちゃんは・・・固まるな、うん・・・つてそうじゃない！なんかねえのか・・・。あれ？なんでみんな外側ガン見して・・・、

——ああ、来たのか)

初めて来た樹海に戸惑っているはずなのに見渡す様子もなく前だけ見えていると思つたらどうやら来てしまったようだ。バーデックスが。敵の実体を少しでもよく見ようと移動し、死角に入る

これは好機。今のうちに——

「——、はい。東郷さんを連れて逃げます！」

逃げれない。こつちに方向転換してくるてかバレ

その時衝撃音。攻撃が開始されたようだ。皮肉なことに勇者部の注意がバーデックスに逸れて、隙が生まれる。

(皮肉なものだが、チャンス！)

回路を起動して、肉体の位相を樹海に合わせ自由を取り戻す。そして着地、脚を強化し即座に離脱。勇者たちの戦いを見守ることに専念する。

（戦況が悪くならねえと俺は手出しできない、そーゆ契約をしたからな。取り敢えず、満開するような事態なれば出るけど）

そう祈りながら、彼は全速で後退する。

---

目の前で起こったことが信じられない。

勇者にク○ガ式変身をしたと思つたら、色々すつ飛ばしてワンパンでバーデックスを沈めやがった。結城友奈が。

基本バーデックスはこうも一撃で殺れる相手ではない。今のアツプデートにおいて鎮魂の儀を行つて、御霊を引きずり出して、破壊する、という手順を踏むのがセオリーである。

満開時ではあればその限りではないが。

成程、だから監視役として自分が選ばれ、派遣されたのか。

（もし、もしだ。アレが大赦に反抗することになるよう事態が起きれば、例えお嬢が出てくれても苦戦は避けられなさそうだな）

勇者部の戦闘をみて思わず、もし彼女たちが大赦に反旗を翻したら、なんて縁起でもない有り得そうな事態が頭に浮かぶ。

（というか、俺としては最悪勇者部＋お嬢を相手するということも視野に入れなくては

ならないのか。やだなあ、勝てる気しねえや)

そして最悪の事態の想定も。

だが、彼は失念していた。この世界に入ったときの悲劇を。

思考を巡らせていて、周囲の変化に気づけなかった。花びらが風に吹かれどこかへ行くように、世界が元に戻っていく事に。

神樹は端末を目印にして、彼女たちを勇者を判断し、樹海化の際の座標を調整している。

そして戻る時も。

だからバグそのものである士郎はめちやくちやな座標に飛ばされる。

四国：某所 上空5000メートル

(神世紀以来、バラエティでも行われることのなくなった絶叫系アクティビティを不幸にも、行なうという貧乏くじを、引いた少年がいた。神のイタズラかそれは唐突に行われた。本来それはやるとしてもインスタラクターがいなくてはならない。説明もクソも知らない素人が1人で装備無しスカイダイビングとか、自殺志願者か何かで？そもそも神世紀以降インスタラクターを出来るような人はいなくなつた。つまりその技術は断絶し、従つてこのアクティビティは絶滅したと言つていい。何で知ってるって？多少は記憶も受け継がれてきたのさ、初代から続くこの魔術<sup>全ての元凶</sup>刻印のおかげでな！そしていま落ちながら絶叫してる少年がいる・・・。

———てか俺だった)

「なあアアアあんでさあああああああ」

## 4話 対峙

現在進行形で落下中。時速は軽く100キロはくだらないだろう。当然地面落ちれば即死。

だから魔術を行使に躊躇いはない。しかし魔術とは極度の自己暗示で成り立つ。呪文はその為にある。もちろん極めれば必要な呪文は少なくなっていくが、生憎こいつは魔術習ってまだ数年。魔術刻印に記憶されてる魔術ならともかく、超高度から落下対策なんてのに使えるものなんて魔術なんてほとんどないし、あっても引き出せるか怪しいのだ。だって刻印は継いで5年も経っていないのだから。だから呪文を唱えなきゃいけないのだが、呪文は長い上に肝心の自己暗示は極限状態すぎて効く気がしない。

それでもやるしかないが。

いつもの呪文を唱える。割と用途は違うが、一番慣れてる呪文を口ずさむ。

「トレースオン、トレースオン、トレースオン！ダメだあああああ全、然成功し、したわ……。じゃなくて！たくさんやらねばまずいじゃん！トレースオントレースオン、

浮遊はやつぱダメだ！」

5秒で諦めた。そもそも不可能である。勇者でも無理だろう。というかサーヴァントでもないやつが出来るわけがない。

その時視界にどこかで会ったような青い鳥が入ってきた。

「そうか！滑空するような感じに！そうだハングライダー！怪盗○ツドみたくやれば！  
トレース・オン  
投影、開始——ツ！」

変な電波を受信した。

「よし、成こ、いやダメだツ、落下中だからもろに空気抵抗受けてすぐ上に行っちゃうツ  
！」

もう一度ツ！投影、開始、これもダメだ、基本骨子が甘すぎる！」

そもそも思いつきで、完璧を求められる状況で新しいことにチャレンジとか無謀なのだ。

結果抵抗虚しく落ちていく

「というかハングライダーなんてもんなんざ直接解析みしたことも投影したこともねえのに  
落下中とか無理やん！」

諦めかけたその時。神樹が氣を利かせたのか。はたまた別の何かか。吹いた！風が吹いた！人一人の落下エネルギーを相殺するほどの上昇気流が！

（なんだ！この気流は！不自然ツ！しかし好機でもあるツ！存分に利用させてもらおう！）

無重力は10数秒続いた。まさに好機ツ！

「トレース・オン  
投影、開始ツ！」

イメージとら寸分変わらず、あのハングラライダーを、彼の魔力は形どった。

（完璧ツ！竿で湖のヌシを釣り上げた並の好感触！）

丁度不可思議な上昇気流は丁度止み、滑空が出来た。

先程の青い鳥が隣に並んできた。

「ありがとうな、お前さんのおかげ助かった」

礼を言うと、あとは何とかしてもらえらるだろう、と言わんばかりにどこか無愛想さの中に思いやりを含んだ鳥は雲の中へ消えていった。

1番の危機を脱して気が緩んだのか、はたまた先程の鳥に何か感じていたのか、よそ見しているとまさかまさかの眼前ゴールドタワー。

5000メートルをハングライダーで下降して行こうという試み事態がやはり無謀だったのか。

衝撃のあまり思考が停止。

ああ、俺こんな所まで飛ばされたのか、なんて現実逃避しても直撃コースである。

詰みである。

しかもハングライダーは既にガタガタ。強化の魔術だけで持つてると言うていい。この速度なら大惨事必至までのレベルだろう。

(やはりヤバイ！)

魔術回路をフル稼働させてか軌道を変える。

が、しかしそれで終わりではない。軌道こそ帰れたものの、体勢がもう滅茶苦茶だよ。

鋭角でのコンクリ激突コースである。

死。  
血筋柄身体は文字通り固いが、痛みはあるし、もちろん打ちどころ次第では即

(南無三ツ！)

死なぬよう祈りながら激痛を覚悟したその時。

紫の花びらが舞った。

そして何故か無傷のまま地面にいた。

そして目の前には。

(精、霊?)

『良かったあ、大丈夫、しましろーくん?』

のんびりしたような安心したような声がした。  
と思っただら、左目が全く違う光景写していた。

ジャックされたようだ。

まず両目とも精霊を視認することはできる。

しかし、その背景が違う。左目の視界には樹海をバックに、イタズラが成功してはにかんだような女の子がいた。何故か真っ先に先程の鳥が思い浮かんだ。

「お、お嬢? な、何で……。てか、精霊なんで使えんだ、使えるのですか! そもそも

何でバリアが」

『……久しぶりにそのあだ名で呼んでくれたね。ああ、精霊はなんか暇だったしやること無かったから、なんか出来るようになったんよ。だから色々代わりにやってもらってたんだ。しましろーくんの左目に一体憑けておいたの』

「」

『ていうか素のしましろーくんて、昔と変わらないうんやね。普段からあんな感じに喋ってくれてもいいのに。幼馴染？なのに。微妙だけど。』

……前置きはこれくらいでいいか。結城士郎君、いや高嶋士郎君としっかりお話がしたいんだ。』

完全に彼女のペースに乗せられた。こちらの手を見せずに逃げることは不可能だろう。そもそも術中にハマっていたのに気づけなかった時点で彼女との差は歴然としている。

既に五感すべてこの異常な光景を伝えている。

相変わらず搦手には弱い。今後のことに思考がを巡らせながら会話を続ける。

「……なにを話すおつもりですか？園子様」

『あーもー、また敬語に戻ってる！』

『まあいいや』

『あなたが私、いや私達にどれほど負い目を感じてるかは知ってる。だって精霊を、仮面を付けたあなたが初めてあつた時から憑けてきたから』

見てきた彼女には止まらない。

『だからその後悔も、自責の念も、その執念も、ミノさんへの断ち切れない思いも、それらを誰にも悟らせない仮面も全部見てきたよ』

「.....」

『だけどさ。ちゃんと直接聞きたいんよ。どういう思いで満開の開発にたずさわったのか。なにをかんがえて、いまわつしー、いやわつしーだけじゃない。勇者部にいるのか』

私への罪滅ぼしだけじゃないでしょう？、なんて続けて。

片目しかない彼女の瞳に真っ直ぐ射抜かれる。何か喋らないと逃がしはしない。そんな意思を、意地を、決意を感じる。

しかし、今は学校に戻らないといけない。勇者部が、特に東郷がやばい。隣のクラスとはいえ教室に俺がいけないことを気付かれてしまうかもしれない。それが彼女たちにバレれば晴らすことの難しい疑いをかけられてしまう。そうすれば任務は失敗。なんとしても奴らよりクラスに戻り暗示をかけなければ。

かといって事情を話しても彼女は納得するまで、少なくとも彼女の知りたいたいことを知るまでは開放してくれないと思う。いつそ全部さらけ出しちまおうか。……。いやダメだ。

——それに今彼女に全て話しても言い訳にしかならなさそうだし。

——きつと全て話せば優しい彼女は受け入れてくれるだろう。

——だけどその優しさに甘えちゃいけないから

——彼女には恨んでいて欲しいから。

だから。

「悪いな、お嬢、用事があるんだ。とつとと授業に戻らねえと平常点を落としちまうんだ。」

……だから今は何も言えない」

不思議と普段の心を押し殺した声ではなく本当に申し訳なさそうなら声がでた。恐らくあの瞳と向き合ったからかもしれない。

そして稲妻のような刀身をしたナイフを左目に突き立てる。

『な——ッ!?!』

突然の凶行に目を向く包帯少女。しかしそれがまずかった。すぐさま精霊の効果は切れ、少女の像は後ろに映る世界と共に崩れていき、彼の視界は元に戻っていく。

それじゃ、と言って世界は<sup>視界</sup>完全に崩壊し普段と変わらない青空。やっぱりゴールドタワー。

ずるいよ、そんな細かい声が聞こえたような気がした。

## 5話 憂鬱

左目の精霊は完全に祓得た訳では無く発動した術式を壊すだけに終わった。

しかし、もうそれを知覚できる。故にある程度ジャミングを応急処置として施す。あとは工房で本格的な処置するだけ。

すぐ魔術をフルに使い、パルクルしながら学校へ戻った。人に見られたかもしれないが事態が事態なので、そうも言ってられない。端末を開きながら先を急ぐ。

端末には、4人の勇者の位置座標が表示されている。

(1ヶ所にまだ固まっているということとはか4人とも屋上か。まあ授業中に抜けたのだから、終わるまで待機するつもりか。都合が良い。面倒な言い訳は考えなくていいか。勇者には暗示効き難いから楽でいい。チャイムなる前に終わらせねえと)

学校が見えてきた。裏門から入る

軽量化をかけ、身体強化。無論跳び上がりいきなり教室に突っ込むわけには行かないので、教室には1階から入りつつ階段は壁キックで駆け上がる。

着いた。

授業中ではあるが躊躇いなくドアを開ける開ける。

教室は消えた生徒のことで騒いでおり、先生が話をしている。隣のクラスも同様だ。

そしてその本人が教室に入ってきた。当然誰もが注目する。魔術師は目立つのは嫌う傾向にあるが、今回はこれを逆手に取り暗示を発動する。何をするか。それはいたってシンプル。後天的に付属させたランクの低い、それでいて一般人には有効な暗示の魔眼。

しかし低ランク故に、見ただけで発動とはいかない。

割と厳しいその発動条件は目を見ること。

クラス全員の視線はおもに顔に注目している今。

条件はクリアした。

『俺がいきなり消えることに違和感を覚え、誰にも話すな』

囁くようにつぶやく。しかし元々鎮まりかえっていた教室なのではつきりと皆の耳に届く。

元々暗示は投影を除けば一番得意なのだ。

あれから何事もなかったように時は進む。次の授業が始まり、そして下校。勇者たちは放課後も残っている。4人で話したそうだったので、士郎があらかじめ察して帰った形である。

同級生と別れ、未だなれない我が家へ一人歩きながら考える。ここ最近一人だと気分が落ち込んでしまう。思考も引き摺られてネガティブになる。今日の事が、引き摺っているのだろう。

特に乃木園子とのあの別れ方は胸が気持ちの良いものを残すようなものではなかった。

戦略的にも彼女との関係的にも。

乃木園子は特別だ。元々かなりの天才肌で祀られている今でも大赦の切り札とまで言われている。というのも霊的欠損を持つ人間は霊的、つまり神秘に対し敏感になる。故に精霊が増えたこともあり、神秘、神威を体現する勇者としては五体満足の時よりかなり強くなっている。

さらに身体の殆どを神に捧げ、神の遣いを大量に使役できるほどの神樹とのパスを持つ彼女はある意味この世で最も根源に近い人間と言えよう。魔術師としてのキヤパシテイは彼女の方が上なのは間違いない。

その証左として、今日魔術のまのじも知らない筈の彼女が、昔見ただけであ

は手探りで本職——へっばこではあるが——出し抜くという事が起きた。前回と同じ逃走方法ではもう対応されるだろう。

それに彼女は2年前から言ってるではないか、お話を聞かせて欲しいと。その並々ならぬ才能と絡み合う執念は自然に消えてくれることは無い。仮に術中にハマれば万にひとつも勝ち目は無いし。

(かと言つて降参してすべて話すのはダメだ。

でも精霊を憑かされてしまつていた以上、どこまで知つていて、誤魔化しきれるか。

最悪我が一族の目的にして悲願すら知られていたら力づくで阻止されてしまうよなあ。まあ、反応からしてそれはなさそうだけど。

——ああでも精霊ごと特殊な能力がある以上強制自白的な能力があつたらやばいな)

その手の能力には連綿と今代まで受け継がれてきた魔術刻印、そしてそこに従う歴代の執念（執念）による耐性があるが、それがメインではないからどこまで持つかは厳しい。

本来魔術刻印はその代の成果を確実に安全に継承するためにある。そのため持ち主が継承する前に死なないようにと生存補助機能も付いている。その一環として持ち主の身体に悪影響を及ぼすものを弾く役割もある。

しかし、普通の魔術は割とへっぽこな一族であるためその機能もへっぽこ。

(だから才能の塊たるお嬢相手だとかなり怪しいんだよな、これ)

そんなどうしようもない理由もある。

でもそれに頼るしかない。

自分の行動は他者を勝手に基準にした自己満足なのは2年前に思い知らされている。それでも進むと決めたのだ。その他者だろうと止まる気はない。

犯してしまった罪を帳消しにできるようなそんな何かを残さなくてはならないから。

自分がまだ三ノ輪銀に惚れている『高嶋士郎』でいられるうちに。

## 6話 覚醒

翌日の樹海。

勇者部にとって2回目の戦闘。なのだがよりによって相手があの蟹と蠍と射手座。勇者にとっては最悪の、トリオ。

(精霊バリアが実装される所以となったトリオか。悪夢のようだな。バリアは範囲攻撃をしてくるような連中対策だが、ぶっちゃけそっちの開発には関わってないからどこまで耐えられるかわからんのだよなあ)

割と激戦な様子を見物しながら考える。視線の先では後ろから反射された射手座の矢を友奈が

突<sup>ラッシュ</sup>きで捌いている。

(まあデータではあの太陽みたいなのも防げてたくさいから強度はある。が運動エネルギーは防げないしな。蠍に遠くへ吹っ飛ばされてその間に神樹に到達なんてことはや

めてくれよ?)

と思つてたら、今度は蠍に突き上げられている友奈。想像通りというか当たり前というか運動エネルギーは受け流せずにいるらしい。

犬吠埼姉妹は射手座と蟹座のコンビネーションに苦戦している。

(ああ、これはまずい。押され始めてるか。東郷戦えなさそうだし、ルールどおりにそろそろ俺がd)

刹那、視界の端で見覚えのある青い閃光が走つた。

そしてバーデックスが狙撃されていた。もちろん士郎ではない。見えた銃弾、  
——  
というかエネルギー弾は青色。つまり

(東郷かーあいつ、ついにー)

やはりと言うべきか狙撃ポイントを目を強化して視る。

狙撃主は2年前と同じく動かない足の代わりにやはりというべきかりボンで立っていた。がその姿は凛々しさは変わらず、その顔には覚悟が感じられる。

変身するまでにどんなやりとりがあつたかは分からないが近くに友奈がいるので、彼女がなにかしたのだろう。身体が覚えているのか、それとも勇者になつたからか、慣れた手つきで敵を次々狙撃し、攻撃を完封していく。

(ああ、ある意味これはリベンジマッチだ。お嬢がみてたら、ここにいたらどうしていた

だろう——)

あのトリオは鷲尾須美——東郷美森にとって親友の仇。記憶を失っているが、身体は戦い方と同じく覚えていてるのだろう。

——あの三体により負わされた傷を

——大切な宝物親友を奪われた雪辱を

三体の行動を抑える様に攻撃しているが明らかに射手座に集中してる気がする。

鷲尾須美時代に脳内シミュレーションをしていたのが少し残っていたのか、

(不思議。すごく身体に馴染む。銃なんて初めて扱うはずなのに、でも)

もうお前らの連携に敗れはしない、そんな決意が不思議と湧き出た。

それは記憶を失った後でも確かに。

ダメージをおった射手座の封印の儀が執り行われる。御霊を高速円運動し、攪乱するがあっけなく東郷に撃ち抜かれる。

そこからまさに優勢。

それから次々封印の儀が行われ、東郷は他を抑えているり最後の足掻きとして御霊が色々したがあんま意味なかった。

一瞬銃口がこちらを向いた気がしたが、気のせいだろう。

今回のお役目も無事終わり、世界はまた花びらに包まれる

---

(また報告だ。めんどい。)

とりあえず、問題なく。ところで樹海化時の座標バグに対する対策はまだですか、と。)

メールを打つ。眠いんで寝ようとした刹那にメールの返信。

(はやっ、………えっ)

内容は1ヶ月あとの追加メンバーのお知らせ。待つてましたと言わんばかりの速さ。ずっとスタンバってましたのか？

(ええつと、三好夏凜……、春信さんの妹さんやんけ！割とつんつんしてて、チヨロインの匂いがするあの子かよ！あーもうめちやくちやになるよ。確実におちるな人たらし)(友奈に)、断言できる)

## 7話 登場

以前彼女は勇者候補の選抜試験で見たことがある。というか試験管その3か4だったのでやり合った。仮面つけていたし、厚底靴を履いていたから試験官の1人としてしか認識されてない。

しかしふとした拍子にバレるかもしれないし関連づけられるかもしれない。彼女の戦闘における観察眼は正直怖い。

それはともかく。戦闘スタイルは二刀流。使う端末の影響だろう。デジャヴュを感じる。当たり前だが。

色々思考を巡らせるが眠いんで落ちた。

巫女の子も1ヶ月間はバーデックスは来ないし、任務もないし、いいかうん。そんな考えと共に落ちていく。

「連続で4体も来たのに。パタツと来なくなりましたね…。」

「平和ねー、1ヶ月も何も無いと」

「こんなに開くとなんか鈍くなっちゃいますよ。あと8体って分かってるんですから早く終わらせたいです!」

「平和でいいじゃない、友奈ちゃん。でも気が緩んじやうのも一理あるわ」

部室は至って平和。

1ヶ月バーデックスの襲来はなかったのだ。元々勇者になると言われてこなかった彼女たちの気が抜けるのも無理はない。部長なんてあくびしてヨダレ垂らしている。妹が注意されている。

「しっかし1ヶ月かー。そういうやあいつも2回目の戦闘が終わってからは部活来たのにここ3日また用事で来なくなったし、あいつ部長としてガツンと言ってやった方がいいのかしら」

「そういえばお姉ちゃん。前回は部室にいただけだけど、他所で活動してる時にバーデックスがきたらどうするの?」

「それは前から思っていたけど、士郎くんがいるから大丈夫だと思うわよ」

「ああそれね。当初は勇者に選ばれるとは思ってなかったし考えてないのよねえ…。」

結論から言うとな、現状東郷が言った通りの解決策しかないわ」

「士郎が来てる時は大丈夫だけど、来てないこと多いもんね」

「そうなのよね、そこが問題なのよ。ほんとあいつ用事って何してんのかしらね」

「さあ、私にも何も言ってくれないし…。あつそうか、もしかして照れてたりして！」

「まあ、女子率高いもの。ま、そもそもあいつ友奈にくっ付いて入部したようなもんだし。自業自得というやつね」

「だとしたら結城先輩なんで入部したんですかね。異性目当てって感じでもなさそうですし」

「謎が多いのは確かね。私でも知ってるのは妙に刀剣類の知識が多い事と…、あとすごいゲーム好き。それに…」

「お料理がとっても上手なんだよ！特にうどん！」

「えっそうなんですか！」

「そういえば樹は食べたことないわよね。いやあ、あれば目を向くわ。私はおろか東郷すら手放しで褒めてるもの」

「そんなにですか！ああちよつと食べたくなってきたあ」

「あと最近なんか艦隊が出るゲームやってたなー、パソコンで」

「ほう、それは都合がいいわね。これはなんか気に入らない彼にも護国思想を植え付けるチャンス！国防の何たるかを彼に布きよ」

突然アラーム。

「残念それはまた今度ね」

「むう」

「いざ戦闘と」

「思ったら」

「新しいのに倒されていた」

樹海に入ったと思ったら、誰か先に戦ってて急いで見に行ったら終わってた。単体だったのもあるが1人で儀式して御魂引っ張り出した破壊してた。

「私こそが完成型勇者、三好夏凜よ。という訳であんた達はもう戦わなくていいわよ」

「なんだこの勇者!？」

「お姉ちゃん、キアラ変わってる」

「三好夏凜ちゃんだね？私は結城友奈。これから一緒に戦おうね」

「ふん、私一人で充分対応できるわよ。手を組む必要なんてないんだから。」

……………それはそれとして。さつきから何チラチラ見てんだ!」

唐突に後ろを振り向き刀をフルスイングでぶん投げる。丁度50メートルくらいの根に当たり、小さな爆発が起きる。

「ぐぎやっ!？」

カエルを踏み潰したような声がある。

「まさかの6人目?!」

「やっぱり……」

「で、でも端末には何も映し出されて」

「その反応見ると全く気付いてなかったみたいね。それに比べ奴の隠れ方からすると割となれてるみたいだし、最初からいたんじゃない?あと私は聞いてないし六人目はないでしょう。リーダーに反応ないしなのが証拠よ。

———「さあ、姿をだしなさい!」

立ち込める煙からひとつの白い影が躍り出た。

「や、やれやれ、相変わらずお兄さんに似て強引だね」

「な、なんか出てきたよ!」ファッ!?

「なんだこの仮面野郎?!」キョウガク

出てきたのは白いフードに仮面かぶった同じくらいの年の人物だった。声からして男。それも中学生くらいなの。

しかし口調は余裕ぶつてはいるものの、突然の攻撃にキョドっているのがありありと見える。

「やっぱあの時の」

「ええー、誰ですかあなたー」アセダラー

（くっ、勇者部がいる以上下手なことを言えば結城士郎に結び付けられてしまう。道化を演じてここは切り抜けよう。直に樹海化も）

「はっ、完成型を舐めんなよ。あんた選抜試験のときいたやつよね？試験官として。あんたの動きはよく覚えているわ。それに口調も明らかに取ってつけたようで不自然。相変わらず、なんて言うなんてあたしと会ったことがあるのを認めている証左。なのに何故そうするか？それは少しでも正体がバレるのを防ぐためね。つまり普段の口調で喋れば後ろのヤツらにバレやすいつてことでしょ？」

「えっ、何言ってるのお前。私少し異能の力が使える大赦役員ですよ、ハイ魔術使いです」（何いきなりやばいネタにたどり着いてんのこの人?! 何いきなり限りなく真実に近い推論あいつらの前でぶちまけてくれてんのこの人!?! 怖いんだけど!! 完成型怖すぎんだけどオオオオオ!?! し、しかし今の俺は厚底の仕込み靴を履いている。あの時もそうだ。つまり身長から同年代と割られる可能性は少ない。大丈夫、大丈夫……のハズ……だよな?）」

「で、でもなんで大赦の人が？あの人もお姉ちゃんも知らないのに」

「さあ、分からないわね。でも彼は少なくとも私たちに近い男性であることは確かね」

「まさか士郎!？」

（あかん、これじゃバレるう!?)

「それは早計かもしれないわよ、友奈ちゃん。確かに彼は何か隠してるのは確かだけどね。みんな彼の言つた事を思い出して」

（！ナイスだ東郷さん！）

「？相変わらず、て」

「そこも気になるけどその後よ」

「！魔術使いって言つてました！」ハッ

「ええ、そうよ樹ちゃん。そもそも樹海に入れて、先程の攻撃を捌き私たちの目の前まで跳んで来た時点で時点では何かしら異能の力を持つてるのは自明の理。魔法使いじゃないのは不思議だけど、とりあえず神樹様によらない力を振るうのはたしかね」

（前言撤回。姿勢しただけでここまで推察するとかこいつやべえ）

「すごい！さすが東郷さん！」ギュー

「最後のは感覚的なもので何一つ根拠にはならないわよ／＼」テレテレ

「ううん、東郷さんの感覚だもんきつと正しいに決まつてるよ！」

「もう、友奈ちゃんたら／＼」 テレテレ

（おかしい。若干シリアスなのに、地味に百合空間が展開されてやがる……ッ。）

「ゴホン！ つまりどういうことよ？」

「あ、えつとですね。ほぼ丸腰で樹海に来れるほどの能力があるなら、容姿くらい変えられると思うんです。それに勇者にも秘密なんですから、きつと大赦の暗部の人かと」

（年齢は誤魔化せたけど、色々推察されまくった上に過大評価された。これもう警戒されまくってますね、間違いない）

「へえー確かにそういう線もあるわね。流石伊達に精霊三体持つてるんじゃないのね。それはそうと兄貴の知り合いみたいだし聞かか」

（なんかもう馴染んでますね。あと晴信さんすいません）

「大赦が何か私たちに開示してない情報があるのは確かね」

「一体何故大赦はこんなことを」

「そんなのあいつをつかまえ——ちつ、時間切れか」

世界は元に戻り始める。

「今回は誤算中誤算。当たり前だが敵ではないことだけ覚えていてくれ」

大人っぽく逃げるようにそう告げると世界は花びらに包まれる。

## 8話 密会（笑）

隣のクラスに転校生が来た。

名は三好夏凜。すごい自信家であり努力家。厳しいかなと思つたらかなり面倒見の良い性格。なんだこのヒロイン属性。東郷にも引けを取らない。

そして勇者部に放課後乗り込んできた。

何やかんやあつて、入部してた。

劇とか色々活動には初めは参加しなかったが。

まだ馴染めてなさそうだが、こればかりは彼女たちに任せる他ないだろう。男がでしやばらない方がいい。

それに始末書が沢山あるしな！そんな余裕ないしな！死にそう。

三好夏凜が転校してきて数日後の放課後大赦ではない讃岐中の近くのカフェにてにて

少年と青年が向かい合つてすわっている。

「おまえ、夏凜の前で盛大に俺の名前出したらしいな何考えてんの、おっ?」

「すいません許してくださいなんでもしますから!」ドゲザ

「確かにあの大赦の、無駄に多い制約はいくつかお前には無理そうがあるのは分かるが。せめて自爆はやめろよてめえ。お前立場分かってんのか?お前の存在は、気に入らねえが、勇者の個人情報より重いんだぞ?もう一度聞けど、分かってんのかア?」

「すいません許してくださいなんでもしますから!」フカブカドゲザ

「それしか言えんのかこの猿ウ」

「妹さん優秀すぎんすもん!なんすかあれ?!単体性能高くて、感知力も高い上に変態的な精密さでいきなり刀本気でぶん投げてくるんすよ?!回避遅れてたら眉間に刀生えてましたよ!固有結界暴走してないのに!オマケに推理力も高いときた!どないせゆうんですか!」

「おいおい、当たり前のことを言うなよ。夏凜がすごいのはずっと聞かしてきただろう?まだ白兵戦ではお前が上だが、そのうち超えるから。四国一だから。」ドヤア

(こいつちよろいな)「今までただのシスコンかなー、とか思ってたけど、モノホン見えてきたあとだと笑えねえ…。妹さんの話はここまでにして。樹海化時の俺のランダム地点スタート対策まだです?今回身バレしそうになっちゃったのもそのせいなんですけど。」

「ああ、アレな。技術部からもう届いてる。今呼んだのもこの為だ。ほれ」

小さな小箱が渡された。

「手渡しすか。というか妹談義だけじゃないんですね。」

「つたりめえよ、妹のも目当てだがメインはこっち。そら、開けてみ」

中身はイヤリングだった。割とオシャレな、それでいて片方しかないという。

「はえー、なんか凝ってますねー。いや、見た目だけでなく中身も。視た感じかなり手の込んだ構造してて、その中に複雑な術式が組まれてて、と複製しろと言われたら頭痛くなりますね」

「そらそうよ。設計図はきっちり残ってるとはいえ技術部が2度と作りたくないというほど大変だったらしいぞ、これ。ヘタしたら勇者システムより複雑かもしれない。」

「だからこれすごいカツカツというか無理やり詰め込んだ感が……」

「ああ。これ試作品的なものなんだけど、だからかな。そしてすごく壊れやすい。しかも部分的に」

「えっ」

「元々お前さんの要望の機能のみの予定だったんだが、先日件の件を受け、急遽スマホとの連動機能もつけるようにと上からのお達しでな。勇者の端末と同じくバーデックスの位置を示せるようにしろ、と来たのさ。おかげで技術部は最近までデスマーチよ」

「えっそんな最近なんすか?!なんか申し訳ないな……。でも俺の端末使えば良かったのでは?勇者システムと同じものを一部入れればいいし」

「確かにその機能をスマホに詰め込みや済むものだが、お前さんの端末は既に刻印共鳴用の重い夢幻召喚システムデータがあるだろ?なら新しい端末用意するより注文されてた外付けイヤリングの方にお望みの機能全てを入れた方が手っ取り早いんでね?といううち狂った発想にいたった訳だ。まあ普通の端末にデータだけ入れるならともかく魔術やら呪術やらぶち込んでるせいで許容量はさらにオーバーしてる。それを無理矢理詰め込んだせいでかなり壊れやすくなっちゃったのさ。特に中身が」

「／(へpへ)?」

「そんな顔すんな。壊れやすいつてのは、それこそ接近戦で生きるか死ぬかみたいな時には到底耐えれないということだ。基本遠距離かヒットアンドアウェイな感じでいけばギリギリいけるだろうよ。まあそもそもお前が出なきやいけない場面には早々ならんだろう」

「そんなとこすかね…。」

男子中学生

「ところで密会みたいな形でDCにプレゼントみたいな箱にイヤリング入れて渡す図って傍から見たら、かなりやばいのでは?」

「はっ倒すぞお前」

後日、すっかり勇者部に馴染めてる夏凜ちゃんの姿がありました。誕生日パーティーもしたそう。そして結城家にて

「誕生日パーティーとかしてたの!?!」

「ごめん、普段からいないから忘れてた……、いやほんとごめん」

女子だけのパーティーに参加するのなんかアレだが、存在を忘れられてるのは傷つく。

ある意味自業自得だが。

三好夏凜が転校してきて数日後

大赦にて

暗い祭壇に足音が深夜だというのに響く。

聖域たるこの場所にいつも来るのは仮面をかぶった大人達。

しかし、足音は場に敬意なんて一切払ってないようなラフな格好な男によって鳴らされていた。

「悪いなこんなに夜遅くなつて」

全身に包帯を巻き祭り上げられるという、2年前とはかけ離れた、そしてそのままの姿の少女がいた。

「まさかちゃんと来てくれるだなんて思つてもなかった」

「期待されてねえな。ま、当たり前だが。あの後あれだけの精霊つけられていたら諦めもしますわ。今度は遠隔でしかも三体も取り憑けやがつて。おかげでジャミングも大変だつたぞ」

男は飽きたように愚痴る。やれやれと言つた感じに。しかし視線は真面目で真つ直ぐ彼女に向けられてる。

そして乃木園子は口が動く。

自分への罵倒か、世界への憎悪か、大赦からの扱いへの批判か。

どれがきてもおかしくはない。身体か身構える。

「……………四体」

「えっ」

—次来るバーデックスか？

—いや、だとしたらなぜ知っている。上里の血を、引いていないことはなかったはず

だが、（彼女には魔術師の素質はあったが）巫女の素質はなかったはずだ

——いやそもそも知っていてなぜ俺に教える？まさか次の戦いはそんなにきついのか？それも満開を使わざる得ないような

「えっと、その……人ってね、奇数に安心感を覚えやすいんよ。

……まあ、ジャミングは効いてたし五体以上いると思ってもつと調べられたら祓われてたと思うけど」

死にたくなつた。

精一杯のフォーローなのだ、逆効果である。

固まった。当たり前だ。ジャミングは成功してたものの、取り憑けられてた精霊の数をドヤ顔で言つて間違えるという、穴があつたら入りたいミスをした。しかも相手は魔術の才能こそあれ、知識に関しては素人なのだ。

神聖な空間にてカッコつけてしくじる哀れな姿な男がいた。

## 9話 決裂

沈黙が続く。なにか話そうにも頭が真つ白だ。昔から予想外の出来事には弱いが、ここまでは思わなかった。

しかし沈黙は彼女によつて破られた。

「ねえ、……私たちみたいにならぬ、今度は勇者部が散華のことを知らされないまま戦わせられるの？」

その声音は静かな怒気をはらんでいた。

その質問の答えを彼女は分かりきっていた。

けれど、違ふと彼が言つてくれるのをききたいしていたのかもしれない。

自然と頭は戦闘用に切り替わる。

つまりこれは命をかけた場になると本能が判断したのだろう。

彼女に今まで何も明かさなかつたのだ。ましてや彼女にとつて自分は見後手な偽善で満開を生み出した元凶とも言える。結果的に人類は存続出来たが、彼女たちの体の機能は虫食いのように奪われてしまった。憎く思うことはあれども、信頼なんて元から無いも同然だろう。

「ああ、そうだ」

先程の未熟さはどこへ行ったのか。大赦の役員達と同じ感情を押し殺し、何も悟らせない、感じない機械のように答えた。

これは分かりきった事実。簡単にバレる嘘はつかない。意味が無い。故に即答。

「ああ、そっか……。変わったってしまったんだね君は。取り返しのつかないところまで」

動揺していた時と自身の質問を答える時の落差をみて、自分のよく知る高嶋士郎はいなくなつたと理解した。

名家の家の息女として教育を受けてる彼女が珍しく負の感情をあらわにした。

彼女は、今まで接してきてた相手が、少し心配していた知り合いが、そして少し気になつていた男の子が自分を、自分たちを人類守護の道具としか見てなかつた、という失望を抱いている。

しかし弁解をする気は無い。資格はない。

すべて話せば彼女はわかつてくれる、という甘えがあることを士郎は自覚していた。

だから――

「変わるも何もこれは真理だ。多くを救うために少数を犠牲にする。人類に群れるという特性が出来てからある常識だ。というか、今まで散々その少数の犠牲の上に成り立っている当たり前前の生活って奴を謳歌しておきながら、自身がその少数になつたら被害者

ぶるとか有り得ないんだけどな」

本心とは真逆のことをのたまうこの口は、相手の地雷をドロップキックをかますかのように相手をより効果的に挑発し、徹底的に自分を落とし込む。自分を最低最悪の人間と思わせるために。

「……………」

ますます彼女は怒りが露わになっている。

しかしそれは表面上の話。

心は波風ひとつ立っていない。ただどうしようもなくそこから温度が下がっていくということだけ。

「だからこそ、その大多数にいる俺たちはその犠牲を何一つ無駄にしないよう日夜頑張ってるのさ」

ここで真実を混ぜ込む。嘘を信じさせるのは真実を、それも相手がそう分かる類のものを混ぜ込むというのが上等テクニク。

「…………そう、それがあなたの考えならなら私にも考えがあるんよ」

今までで最も不機嫌そうに言い放った。まるで、今から本気で叩きのめしてやる、と宣言するように。

戦つてもいないヤツらが安全圏から今まで犠牲になつていった人たちを無駄にするな、と言う。

これほど実際に戦っている人たちを不快にさせるものはないだろう。そしてきつと、大赦は自分を戦わせる時はこれと同じことを言うのだろう。乃木園子はそう思つてゐる。

だがしかし。

彼女がいま腹立たいのはそれではない。

嘘をついたこと。自分にだけではなく、彼自身にも。彼女のひとつしか残つてないその慧眼は見抜いていたから。

真理だの常識だのぬかしておきながら、それに最も反感を抱いているのは自分だと気づいていながら、自分を押し殺していること。

だから、人にそうのたまっているのは結局自分に言い聞かせてるだけなのだ。

——このままでは彼が壊れてしまう。自分がやらなくてはならない。じぶんしかできない。じぶんのすきなかれをとりもどさなくては。止めれるのは自分しかない。

だから彼女は強硬手段にでる——

乃木園子の雰囲気が変わつた。なにか良くないものに。

話し合ひは無駄と思ひ知つたのか、何かを仕掛けようとしてくる。少なくとも高嶋士郎はそう感じた。

頭が、身体が、刻印が、理性が警報をならす。

やばい最悪だ逃げろ、と。

確かにこの状況において彼にとって不利なのは明白。虎穴に入らずんば虎子を得ず、というが、しかし、この場合虎に大人しくして貰うため餌をやり虎穴入るといふ無謀を犯している。

だが、そうと自覚していてもこれは予想外で想定外だった。

しかし、ここですくんでいても仕方ない。怯んでなんかいられない。だから逃げずに向かい合う、彼にはその意志があつた。この場合曲げるべきものだった。

呪文のように己にそう唱えるように、彼女に話す。話そうとして——  
「私、今の貴方はのことは嫌い」

ようやく自分が相手の術中にまたもやハマつてゐることに気づいた。

「自分を押し殺して罪悪感による義務感だけで動く君なんか」

（——あ。）

身体中縛られたように動かない。

「これでようやく、ゆつくり君の本心全部聞き出せるね。大丈夫。まだ精霊使うのにはまだ慣れてないけど――

今まで散々約束を（割と一方的だったが）反故にし続けてきて怒っているのは分かるが、いきなりのこの変化は明らかにおかしい。

（そういうえば精霊を手足の代わりとして使役してるって……、あ）

脳内には西暦において起きた、勇者システムの一部機能の副作用が頭に浮かんだ。

反英霊のコピーを精霊という格まで落とし込み明確な意思を持たぬ力の塊にして、人の身に降ろし、その力を行使する切り札。

初代高嶋―衛宮士郎を参考に発明され、この魔術刻印の原型となったシステム。

そしてその副作用は負の感情を増幅させる、疑心暗鬼を深めるなどの精神汚染。

これには当時のほぼ全員の勇者が悩まされた。勿論己の祖先も。

その対策として、精霊を肉体ではなく武器に宿すという方式が採用された、ということも。

そして今の彼女は端末を持っておらず、死を防ぐための精霊しかない。つまり生身のまま感覚を精霊とリンクし、使役してたということになる。

それが何を意味するか、考えるまでもなかった。

(下手な秘密主義が彼女をここまで追い詰めたのか、それとも——)

この副作用は精神力である程度カバーする事が出来る。しかしそれは一体までの話。複数の精霊を同時に、正確にコントローロールしてするという事は精神を殺すようなもの。

なまじ才能がある分、精神力の強い彼女がここまでになっついて自覚出来ていないこの状況がそれを物語っている。

(なるほど引き金を引いたのは俺、という訳か)

——そのうち慣れるから♡」

その笑みは蠱惑的にして無垢という矛盾した印象を抱かせた。

そしてその顔に見惚れていた。

だから反応に遅れてしまった。

樹海化がこの部屋が起きていることに。

無数の花びらが視界を覆う。

そこは神域にして幾度も続いた決戦の場。

空は暗く、地を這い絡み合う巨大な根は白の上に明るい絵の具を飛び散らしたような

見た目をしていた。

外縁部には細い木が絡まりできた壁があり、その奥には見せかけの世界を映し出している。

そして目を引くは中心に位置し、一際輝きと神気を放つ大樹。

樹海。何人もの勇者が命を落とした。

自身の想い人さえも。

## 10話 侵食

視界に入る全てが樹海に飲み込まれたという衝撃の事実を思い知らす。

——馬鹿な。ありえない。どうやって。

「樹海化つていうのはね、君の固有結界と同じなんよ。」

彼女の普段どおりであつた間延びした声がした。

この異常な事態での普段通りは、彼女の非凡さをより一層際立たせた。

至る所に動かなくなった身体を補助する布のようなものが付いている。例えば後に髪をまとめているリボンが伸び、彼女の足の代わりを果たしていたり、と。

「固有結界は心の内と外、空想と現実を入れ替え、己が心象世界で現実世界を塗り潰す。樹海化も同じ。そして神樹と繋がり深い私なら入れ替えられる前の内側に入ることだつて出来るんよ。」

2年前、よりもさらに不自由さを感じさせるその見た目とは裏腹にその纏う神気は勇者部の誰とも比べようもないものであつた。

だから直感的に理解した。

(楽には勝てそうにはないな、これ……)

今の乃木園子は持つ同時に操る武器一つ一つがバーデックスを屠るのに相応しい威力を持っている。

自分をアーチャークラスのサーヴァントと例えるなら、まさに彼女はライダークラスも真つ青ならくらい宝具を持ち込んで、常時発動の絶対防御をもつランサークラスのトップサーヴァントと言つていいだろう。

「それを知っているなら、大体のことは分かっているんじゃないのか？俺からいちいち聞くなんて手間のかかることしなくて良かったと思っただけ。」

「ある程度は調べただけど所々抜けがあるしね、なら全部知つてそうなら君にあつた方が早いと思つてね。でもただでは教えてくれなさそうだし、力づくで、ね」

戦闘は、避けられない。

斧、馬上槍、大剣、戦斧、薙刀、盾、突撃槍、刀、大槌。

投影して相殺する間もなく飛んでくる凶器は前後左右上下あらゆる方向、あらゆるタイミングで襲いかかってくる。しかもこれが彼女の持つ全ての武器ではない。

「ッ!!?!?」

干将莫耶を投影し交戦するも捌ききれない。

「がっ——!?!」

刻印、全身の魔術回路全て活性化させての投影ですら、高濃度の神秘を纏いし武器は投影しきるには時間があまりにもかかり過ぎ、結果軌道を逸らすしか手段はない。

「ぐっ、うおおおおお!!」

しかしそれも二重の意味で長くは続かない。

武器の投擲はだんだん苛烈さを増し、さらに回路を酷使し続ける戦い方は彼の恐れる記憶、肉体の侵食を早める。痛みを伴いながら。

12合目にて遂に間に合わなくなり、脇腹が切り裂かれる。

「ぐっ、あああああああああ」

痛みを和らげるためか、気合を入れるためか、叫び、後ろへ大きく跳んで彼女のテリトリーから抜け出す。全身生傷だらけ。頭はぼんやりする。

だがこれにより武器飛んでくる方向は前方から

—少しの間だけが—絞れる。が。

(ダメだ、ジリ貧過ぎる!)

英霊というのは人を超越したものだ。どんなに弱い英霊でも一般人に比べれば超人であり(一部例外あり)、その力を行使する彼の攻撃も生身で食らえば大方の人間はミンチになる。

だからこそ勇者バリアの発動条件を容易に満たしてしまう。故に勇者の装備を纏った彼女は生半可な攻撃では止められず、かと言って、英霊化すると強すぎる攻撃により条件が満たされ、完全に防がれてしまい大きな隙を生じてしまう。戦闘に特化した英霊ならば全方位からの攻撃を捌きそのギリギリを見極め的確な攻撃を繰り返すだろうが、彼はそこまで英霊制御しきれていないし、そうできるようになるのは彼にとつて文字通り侵食による死を近づけることを意味する。

のでまだ楽になる遠距離戦に切り替えようとして、

「絶対に離れない」

先程の彼女と同一人物とは思えないほど、冷たく鋭い声音。気付くとすぐ目の前から聞こえた

そんな声音にのせられた言葉と共に放たれた、丁度右肩と鎖骨の間あたりを穿とうとしていた突きを重心を後に崩して躲す。

だがこんなのは前座に過ぎず、それ以上の脅威が迫っていた。

片方しか見えない目に深い虚のような闇を携え狂った言動が次々とともに激しい槍撃の数々が繰り返される。放たれる。吐き出される。溜まっていた鬱憤を晴らすかのよう。

槍と双剣だけの剣戟が四十五合続く。

何故ここまで片腕しか動かない彼女が動けるのか。そもそも後ろに縛った髪から伸びる四本のリボンによる歩行は1、2歩くらいならともかく、鈍足そのものであるにも関わらず。

その理由は周囲に展開した多くの武器を縦横無尽に動き回らせ、身体のどこかに引つ掛け自身の移動手段とすることだ。故に彼女にとつてリボンはただの脚立のようなものであり、そのデメリットはほぼ打ち消されている。

否。それだけではない。

さらに、こと近接戦闘においては『足が着いていなくていい』という利点があり、伸縮自在のリボンにより空中で逆さまになったり横になったりと、その場でアクロバットな槍の運用が可能。

今回は使えない片腕の可動領域を無理矢理カバーし、次々姿勢を変えることで死角からの攻撃を封じつつ、あらゆる角度からの攻撃という戦法をとっている。

しかしこの間、1度も周囲に浮遊している武器による攻撃は無く、剣と槍の応酬のみであった。

そして四十六会目。ガキン！と音がなり、(双剣と槍なのに)鏢迫り合いのような形にもつれこむ。両手持ちの双剣が片腕の槍と拮抗している。

(槍だけだと普通に対応できるけど一撃一撃が重すぎる！めちやくちやな動きをしてい

る接近戦の時は他の武器は動かさなそうなのが唯一の救いだ。この時に決めなきや  
「なんて思ってるでしょ?」

「!?」

ハツタリか精霊の能力か。

しかし死角方向から攻撃は飛んでこない。代わりに身体を地面と並行にし、前方の園子が右斜め前に槍を振りかぶる。

頭を狙う——と見せかけて、リボンを一気に地面から5センチくらいまで縮めて足を狙う。

しかしこの程度のフェイントはこの英霊ちからに少し慣れ始めたこの目の前では無意味。魔術殺しの短剣を投影しつつ、大縄跳びを跳ぶように軽く躲す。

相手はうつ伏せのまま槍を振り切り、それに対し自分は相手より上方にいる。明らかに有利な位置。

余程集中しているのか、目線は不思議と彼女に釘付けになっている。

これだけ隙だらけなら魔術殺しの短剣をその背中に突き立てる事だつて容易だろう。

——おかしい。

短剣を振り下ろそうとして体の中の英霊ちからが警報を鳴らす。

この場面あまりにも出来すぎである、と。

乃木園子というの勇者がこの程度のミスをするだろうか。いやない。彼女は文武両道、才女とまで言われ、かの初代勇者のリーダー乃木若葉の子孫として恥ずかしくない、化け物レベル戦闘力を持つ。それがこんな頭をがら空きにするようなミスを一

その考えに行き着いた瞬間、彼女から目が離せないことに気がついた。

この時、自身を見上げる彼女の口角が上がっている気がした。

刹那、全身がこわばった気がした。だが、咄嗟に身体は空中で身を丸め、防御姿勢をとった。

そして視点を動かさそうも目に、正確には眼球に魔力を込める。鋭い痛みが頭を突き抜け、水分が一気に沸騰したように目が魔力で火傷する。それらを見捨てても魔力を込める。

.....あ。

確かに目から送られる情報の精度は変わった。でも変化が起きたのは『視点』

——ではなく『視界』。

周囲が今まで以上に見える。

しかし、それは妙に懐かしさを覚えるほどしつくりきて、今まで自分は磨りガラスか色メガネをかけていたのかと思うくらいに、より広く鮮明に世界が見える。

こんなのはあの時以来だ。

英霊をその身に降ろし、バーデックスを初めて屠った時のように。

スキル、『千里眼』。

このスキルが発動できたということは、遂に眼球とそれと連動する脳の一部が侵食されきった証であった。

つまり死へのタイムリミットが近づいたことを意味している。

しかし皮肉なことに、その眼は確かに先程までは目で追うのが精一杯であった、彼女のしゃがんだ背後から神秘を纏った武具がひと塊となって突っ込んでくるのをより正確に映し出した。

しかし目が完全に英霊のものとなって反応できるようになったからといってもあくまで目だけなので、回路や肉体は完全にそうなった訳では無い。だから咄嗟に投影して到底防ぎ切れるわけではない。

ノーバウンドで30メートルは吹っ飛ばされ、神樹の根に叩きつけられるのは自明の理であった。

「がはっ?!?!」

ぶつかつた根にはクレーターが出来ており、ぶつかる瞬間の運動量の大きさを物語っている。

だが、意識を失うにはギリギリ足りず壁からずり落ち、うつ伏せの状態で痛みに耐えていた。

身体中はいうまでもなく、勝てなくとも時間切れを狙おうとしていた意気込みもズダポロになつていた。

それなのに特に目だけは激痛が身体のどこよりも酷い癖にスッキリとくつきりと情報を送り続けている。

(まずい、油断してたつもりはないが、あの状態であそこまで動けるなんて予想外すぎる。いまのままじゃやられる。)

うつ伏せになりながらも、首だけ動かして遠くにいる彼女を見据える。

どうやら重傷を負つたと思ひ、激しい追撃をする意志を無くしたようだった。それでも反撃を喰らわれないように警戒しているが。

(それに目も遂に持つてかれた。次はどこを持つてかれるか分からなくて、この樹海にいつまでいられるかは分からない以上長期戦はこつちが不利だ。でもあの飛び回る武器群を何とかしねえと押し負ける。)

自分出来る答えなんてとつくに分かりきっていた。

可能かどうかなんていつてられない。

やるしかない。

今の乃木園子をここまで追い詰めたのは自分。そしてマシな状態にしてやれるのは  
きつと自分だけ。

(……………なら腹ア括らねえとなあ。その為には)

その為には自分の命なんて——

## 11話 極限

園子は勝利を確信していた。何をもって勝利とするかは分からないが、彼女は目的を達成できるという喜ばしきで胸踊っていた。

目の前の目的の彼は既に手痛い攻撃を受け瀕死であり、尋問するには丁度いい。

「♪さてさてさーて、どういふ感じで聞こかつなー☆。」

これから起きることやることになんの疑問を抱かない、抱けない乃木園子は身体中白い包帯に巻いたまま補助リボンでスキップするかのように彼の元へ笑顔で向かう。まるで入院中できなかった彼氏との久しぶりデートを楽しむに無垢な少女のように。

余程楽しみなのか、思わず口に出してしまったがここには自分と彼しかいないためそれを咎める者はいなかった。

しかしその包帯には、頬と肩あたりには、傷つけ吹っ飛ばした彼の血が少なからず付着していて、恋する少女のような笑顔と合わせるとあまにミスマッチ故に猟奇的な印象を抱かせる。

何より――

（痛みで無理矢理喋られせるのもいいけど、精霊で洗脳するのも面白そう♡。あつ、そう

だ☆。悪夢をみせ続けたらいいかな？それも延々と)

その内面はどうしようもないほど、精霊の使役により歪められていた。

(うーんどうしよ。迷うなあ。ミノさんやわつしーがいたら色々聴けるのに2人ともいなくなつちやつたし、悲しいなあ。でもあの二人なら私のすることを肯定してくれるよね、私リーダーなんだし。)

今の彼女は論理も常識も記憶も汚染されている。彼女の友人たちがこの彼女を見たら、本当に怒り、悲しみ、慟哭するだろう。

普段の乃木園子ならそのくらい言われずとも分かっていた。たえ汚染されていようと。

なるべく彼の前でも冷静でいようとした。

しかし、実際に彼—高嶋士郎は何度も彼女を袖にした。すぐに彼には話せない訳があると察した。しかしそれで頭は納得出来ても、心はそうはいかなかった。

そして彼女は彼のことを考える度、次第に冷静さを失いその狂気情動が暴れ出すようになった。

だから、目的と手段が逆転し始めている。

全く話そうとしない、答えようとする男を喋らせるという『目的』ため、暴力的な『手段』にでたというのに、話し合いという『手段』で暴力をふるうという『目的』になつ

てしまっている。

ふと。唐突に。彼女は持っていた槍の穂先を土郎に向け、伸ばした。

別に追撃の必要はもうない。それほど相手は重傷を負っている。これは意味の無い行動。

強いて動機を上げるならば、

何となく。

雑草を引っこ抜くような感じで伸ばされたその凶槍は、しかし彼には届かなかった。

穂先が届く寸前煙幕がはられたのだ。

もちろんこの程度彼女には、取るに足らない無駄な足掻きに映ただろう。感触だつてあつた。

しかし、そこに彼はいなかった。

確かに感じた感触は布の塊。

人を刺したことがないためすぐに気づけなかったのだろう。

「ちえっ」

舌打ちは仕損じたことにだけではなく。

手に伝わった感覚にギョツとしたこと。

それが杞憂だったことに心がほつとしているのを。

この気持ちについて考え、答えが出ないことについて。彼女はイラついた。否、焦っていたのかもしれない。

乃木園子からそう離れていない根の影。

瀕死の体に鞭打ち、ギリギリ躲して姿を彼女から隠し休んでいる男がいた。隠れながら止血しつつ、切り札を切る覚悟を、決めていた。

（もうなりふり構ってたら方に一つも勝ち目はねえ……。一か八か詠唱してやるっ……！）

今まではこの詠唱こそ最大の間であり、相手もそれを理解していたからこそこの手は打てなかった。

しかしもう安牌をとって勝てる相手ではないことははっきり分かった。絶対に勝てる保証はないが、

されど結界を展開し手数を増やさなければ方に一つも勝ち目はない。目を閉じ、拳を握り胸に置く。

「——身体は剣で出来ている。」

身体中に鳥肌が立つような感覚。

全身の魔術回路が更に暴力的なまでに活性化、ショート上等の暴走ギリギリの所。

呪文とは自己暗示の為のもの。自己暗示とはイメージ。

イメージする。自分という器が足から冷水が溜まっていく感覚。

変わっていく。己が変革していく。

何かって？

そんなのは決まっている。

それは常に最強の己自身。

「——血潮は鉄で、心は硝子。」

自己暗示という目的さえ達成出来ればフルで唱える必要は無い。あとは受け継いだ刻印がやってくれる。

「——幾たびの戦場を越えて不敗。」

この極限状態。皮肉にも精神は落ち着いていおり、呪文の効果を何倍にもしていた。

血が更に静かに早く循環、それどころか同じ所を短距離走の如く身体中をグルグル回っている。

全身の魔術回路が全開で魔力を回しているのだ。

「——たった一度の敗走もなく、」

刻印が更に熱くなる。まるで燃えてるようだ。

熱に呼応するかのように空間が更に歪む。

炎天下の陽炎のように。

これでもう隠れられない。

居場所はもうバレた。

彼女はきつとその武器で隠れてる根ごと撃ち抜いてくるだろう。

「たった一度の勝利もなし。」

—— けれど逃げる必要はあらず。

気付いた園子が嬉嬉として高速で接近する。

周りに展開する武器一つ一つが生身の自分にとって必殺。

縦横無尽に飛び回るそれは。

隠れる自分を物陰ごと撃ち抜くだろう。

飛び出てきた所を押しつぶすだろう。

生きるため策を弄するのを突き穿つだろう。

—— どう来ようと、瀕死の彼は逃げることしか、否、それすらできないだろう。

それが園子の予想だ。

けれどそんな予想は全てハズレ。

士郎の取った行動は至ってシンプル。

詠唱しながらの接近。

園子の前に躍り出る。

これは予想外でも余裕で対処できる、園子はそう思った。  
それが狙いとも知らず。

もとよりショートカット版の詠唱。

余裕で対応出来るのはむしろこちらの方だ。

そして唱える。その言葉を。

「それでもこの呪われた剣の体は、

無限の造花で出来ていた

そして世界は塗り変わる。」

## 戒めの世界

青、桃、黄、橙、緑、紅、続いてまた青、紫、そして——赤。

世界が崩れて、慣れた感覚がした。世界を崩したその炎が目の前をおおったかと思うとその光景が目飛び込んできた。これは——、と考え始めたところで思考を中断する。今日の前に映る光景はその色だけではないのだ。

赤いひらひらしたものが右肩の上にくっつきりと着地する。もういいと言わんばかりに。

途端世界がより鮮明になる。

そこは黄昏の荒野。

地面は平坦と言うには大きな凸凹か所々みられる。点々と雲が浮いている空はとつとつに青を失い、太陽は白熱電球のような白から燃えるような夕焼けに移行している所のようにだ。

しかし特筆すべきはその終わりを連想させる光景ではない。

剣がある。

剣がある。

目の前に剣がある。

その後ろに、その両脇に、少し離れた斜め後ろに。

それを観測している自分の周りに。

前後左右ありとあらゆる方向、視線の先、場所に剣が刺さっている。

わかるだけでもまっすぐに諸刃の剣に反りが特徴の日本刀―小太刀、大太刀、短刀などから持っただけでも苦勞しそうなゲームにできそうな大きい大剣、刀身が異様に細長い剣、岩を削ったような斧剣、水晶でできているような剣、三日月のような刀身の剣、白と黒で同じ形状の西洋の剣、先程まで自分が使っていたのと似ている剣、更には記憶に焼き付いている斧剣まである。

ここは、と独りごちる。

この世界はどこか樹海に似ている。

特に世界が切り替わる瞬間が特に。

ふと声があった。意趣返しと言わんばかりに。

「個と世界、空想と現実、」

既にズタボロのはずの身体は芯でも入ったかのように真っ直ぐで。

「内と外を入れ替え、」

その足取りはこの異様な世界を慣れ親しんだ通学路を通るように悠々と軽く。

「現実世界を心の在り方で塗りつぶす魔術の最奥にして大禁呪」

頭からは血が流れ、裂けた服からは所々血で滲んだ痛々しい傷が覗かせていようと。

「固有結界。これは歴代の、そしてこの“高嶋士郎”の世界だ」

その不屈の意思を携えたその眼差しは突き刺すように目の前の敵を見定めて、ゆつくりと2振りものの剣へと両の手を伸ばす。

——自分もよく知るあの斧剣へと。

「ふざけるだろ？ こんなのを三百年も継承してきてんだぜ。こんなみすばらしい心象風景をよ。押し付けられる側にもなれってんだ」

剣を抜き、そして構え、おどけたような口調で自嘲気味に放つその言葉はどこか哀愁を感じさせる。

「これ、は」

トップシークレットの文献より固有結界についての知識は園子は知っている。けれど本物を見るのも初めてだし、固有と名についている以上樹海のそれと全てが同じとは言いきれない。故に彼のこの魔術が世界をつくる他にどんな固有のものを持つのか考察しなくてはならないだろう。

少なくとも聡明な彼女ならそうした。

しかし園子にはこの大量の剣が刺さったこの世界よりも重要な事があつた。先程からこの世界を舞っている無数の花びら。

——彼は言つたではないか。

——この世界は三百年間受け継いだ、そして自分の心象世界だと。

そしてこの花びらと花卉は分かるだけでも桔梗に朝顔、薔薇、桜。そして先程から右肩に乗っている牡丹の花。

これは全て記録に残る歴代の勇者たちのシンボルとなる花たちだ。つまりこの意味は——

(——ああ。やっぱりどんなに偽つても本心は昔のまま、なんだね)

無愛想に冷たく振舞つていても、結局中身は昔のまま。

勇者が傷つき戦う事をおかしいと、それを讃えるのはおかしいと、なんとかしてやれないかと、そう悩んでいた頃のまま。

その事実がどこか嬉しくて、頬が緩みそうになる。

けれど同時に悲しくもあった。彼は本心を殺して真逆の行動をしている。その他多くの有象無象よりも大切な人達数人をとれず、心でその痛みに咽び泣きながら表面はなんでもないように振舞っている。正義の味方なんかをやっている。こんな世界本心を展開しておきながら、それでも自分を騙し続ける。それが分かってしまう園子にとって苦しいのだ。自分は彼をそこまで追い詰めるためにこの身を削ってまで戦った訳では無いのだから。

しかも彼は言ったところで聞き入れてくれない。ならもう方法はひとつしかあるまい。

だから彼女は決意する。どんなことをしても彼に本心を解放させてあげると。数分後の運命も知らないで。

十数振りもの武器が、標的に向かい飛翔していく。けれどその悉くは撃ち落とされ、弾かれ、防がれる。

無数の剣達に阻まれ、彼女の武器は何一つ向かつてくる相手の進路を制限することすら叶わない。先程までの圧倒が嘘のようになっていた。

今や手数の多さは逆転した。

「——くっ！」

「ウオオオ、オラアッ！」

10mくらいから跳躍して身体を捻らせ車輪のように剣戟を浴びせる。

先程まで彼女の移動手段であり、戦闘の要だった複数の武器は全て幾千もの剣に阻まれ使えない。咄嗟に手元の槍を振りかぶり、備える。

ガキンツ！ と。

前方斜め上からの放たれた左右の手で順手と逆手に持たれた斧剣と下段より大きく振った槍が互いの勢いを殺し合った。

一瞬互いの動きが止まる。

刹那互いの目が合う。

園子には目には先程とは違い余裕がなかった。

士郎には目には絶対倒すという意思があった。

(さっきと全然、違う)

一つ一つの武器は自分のそれと比べると幾分か劣ってはいるが、数が違いすぎる。

それこそ、この固有結界の狙いである。

彼の戦法は至ってシンプル。結界の展開前まではひとつの武器で勢いを相殺できなかった。ならその数十倍の数の武器を用意して勢いを相殺すればいい。

そして現にそれは有効だった。

靈力で動かしていようと、1度勢いを完全に殺されればもう一度加速させるには時間がかかる。

結果として相手に接近を許してしまい、受けに回るハメになる。

そしてそれは両足と片腕を使えない彼女にとって痛い所だった。それらを補うため複数の武器は機動と攻撃に使っていたが今や固有結界の無数の剣によって、彼女の元へ馳せ参じることが難しくなっている。

故に彼女は自分から攻めることが自ら難しく、受けに回る他ない。せめてもの救いは相殺することにしか周りの武器を使っていないことか。

(おき、れる)

こちらのアドバンテージを既に崩され、頼みの綱の近接戦は彼の得意な一撃離脱のスタイルに翻弄されている。特に周りの剣に彼女の飛び道具を悉く封じられているのに対し、相手は弓で色々飛ばしながら接近してくる。精霊バリアで傷つきはしないが勢いだけは殺せない。機動力のないリボンによる移動とも射撃によりジリジリと同じ場

に固定されていく。逃げられない。

そしてついに周囲に刺さっている剣を使い始めた。動きののろい彼女には槍で対応する間もなく精霊バリアで防ぐしか手立てがない。

そしてついにその瞬間。

無数の剣戟の嵐の中に。

複数の精霊を使役している乃木園子に。

死角などない隻眼の勇者に。

ついに死角認知しきれない点ができる。

そこを逃す士郎ではない。懐から――予め用意しておいたのだろうか――紫の稲妻の様な刃をした短刀を取り出し園子のもとへ潜り込むように跳躍する。

「破戒すべき全ての符ルールブレイカー」

激しい動きとは裏腹にとても落ち着いた声音だった。それは勝利を確信していたからなのか、これで終わるからなのか、分からない。しかしこれが彼の切り札であったことは疑いようはない。

破戒すべき全ての符。

殺傷能力は勇者の礼装を貫通する程のものではないが、あらゆる魔術を破戒し初期化することが出来る。神と人の契約を破戒しきることはできないが、人の手により紡がれ

た、精霊と人のそれならば瞬く間に初期化してみせよう。有効なのは2世紀以上前に証明されているのだから。刃は障壁を薄ガラスのように突き破り園子の身体へ真っ直ぐと。

「——あ」

それがどちらから漏れたものか。

切っ先が胸に突き立てられるのと同時に世界が白く染った。